

1 はじめに

「少子化」「生徒減」「部活動離れ」などといった言葉が、近年の高等学校の部活動に関わる会議で話題となる。本校柔道部においても、このことは切実な問題である。数年前には、県内大会はもちろんのこと関東大会や全国大会へも出場する生徒もあり、大いに盛り上がった時期もあった。しかしこの3年間、特に男子は、部員不足で新人大会に5人の正規のメンバーをそろえることができない現状が続いている。もちろん本校入学生の中にも中学校時代に柔道の経験者が存在するが、柔道部に入部しないものも多い。このことが、本校だけのことか群馬県全体、または全国的な傾向なのか調べた。下の表は各県の中学校の所属人数と高等学校所属人数を比較したものである。この結果、本県は他県と比べて明らかに継続率が低いことがわかった。このように特に本校のみならず本県では、中学校までの活動は盛んであるが、この盛り上がりが高等学校まで継続しないという重大な課題を抱えていることがわかった。全日本柔道連盟においても普及活動には精力的に取り組んでおり、普及を目的としたイベントなども実施しているが、一度柔道を始めた少年たちが高等学校まで柔道を続けるような具体的な方策はあまりないようである。

そこで、本県中体連、高体連の柔道関係者と相談の上、アンケート調査を実施する運びとなった。アンケートは、中学校の指導者2名と高等学校の指導者2名、その他にスポーツ心理学を専攻分野とする大学教員にも加わっていただき、高等学校新入生を対象として、主に中学校での活動状況を中心とするものを作成した。

【県別継続率】

県名	平成9年中学校登録者数(人)	平成12年高校登録者数(人)	継続率
A	2473	720	29%
群馬	1901	560	29%
B	440	217	49%
C	740	370	50%
D	1277	661	52%
E	1512	804	53%
F	2766	1633	59%
G	2268	1339	59%
H	669	407	61%
I	399	243	61%
J	1228	775	63%

人数は、(その年度の)1年生から3年生までの総数

2 調査方法

- (1)対象 県内高等学校柔道経験のある1年生(中学校時の経験者)
- (2)時期 平成13年4月・平成14年4月
- (3)回答数 平成13年(206名)・平成14年(202名)
- (4)調査方法 質問紙によるアンケート調査

3 結果と考察

(1) 調査対象者について

	平成13年(男子164名 女子42名)				平成14年(男子168名 女子34名)			
	県3位以内	県出場	地区大会	合計	県3位以内	県出場	地区大会	合計
継続者	32名	39名	16名	87名	17名	39名	28名	84名
非継続者	4名	48名	67名	119名	4名	55名	58名	118名
合計	36名	87名	83名	206名	21名	94名	86名	202名

対象者は高校で柔道を継続者と非継続者に分けるとともに、本人の競技力について、個人戦、県大会3位以内入賞者、県大会出場者、地区大会敗退者と分けた。平成13年、平成14年ともほぼ同様の傾向が見られた。継続率は県大会入賞者が86%、県大会出場者が45%、地区大会敗退者が26%であった。この結果は競技者のピラミッドと考えれば当然の結果といえるかもしれない。しかし、各地区の予選で優勝もしくは準優勝している者が県大会出場しているにもかかわらず、その半分以上の者が柔道を継続していないという状況にある。

(2) 中学校の指導者と継続の関係について

指導者の競技経験と生徒の継続率について

	大学まで	高校まで	中学校まで	未経験
継続者	82名(49%)	22名(48%)	7名(21%)	58名(38%)
非継続者	84名	24名	27名	96名
合計	166名	46名	34名	154名

中学校の指導者の競技経験と継続との関係は、指導者の経験の度合いが高いほど継続率は高いようである。特に中学校まで経験した指導者と高等学校まで経験した指導者との差は大きく、高校または大学まで柔道を経験した指導者に指導を受けた者のうち約5割が高等学校で柔道を継続していることがわかった。今までの柔道指導に関わる研究については柔道を専門とする教員の育成の重要性が叫ばれてきたが、中学校の部活動指導においては、大学まで専門的に柔道を経験しなくても高校くらいまでの経験があれば十分に興味付けをすることができるのではないかと考えられる。

指導者の競技経験と生徒の競技力について

	大学まで	高校まで	中学校まで	未経験
県大会3位以内	29名(18%)	8名(18%)	5名(15%)	15名(10%)
県大会出場	75名	24名	10名	68名
地区大会敗退	60名	13名	19名	69名

の継続との関係ほどの顕著な相関関係ではないが、中学校の指導者の競技経験と生徒の競技力との関係について若干の関連があることが推測される。

指導者の競技経験と地区大会敗退者との関係

	大学まで	高校まで	中学校まで	未経験
継続者	21名(35%)	4名(31%)	2名(11%)	15名(22%)
非継続者	39名	9名	17名	54名

(1)の調査で競技力の高い者が高等学校でも柔道を継続している。また、の指導者が経験豊富な場合に競技力が高く、高等学校で継続する傾向にある。そこで、地区大会で敗退した競技力の低い者と指導者の関係について着目した。ここでもやはり、経験豊富な指導者に指導を受けたの方が高等学校入学後、継続することがわかった。

以上のことから、指導者の競技経験は競技力の向上よりも競技への動機付けとの関係の方が関連が深いと

思われる。

(3) 中学校での入部のきっかけについて(複数回答)

	継続者	非継続者
1位	体力増強・健康増進(72名)	体力増強・健康増進(110名)
2位	以前から柔道の経験者(58名)	精神力の向上(61名)
3位	精神力の向上(46名)	友人との交流(50名)
4位	強くなって試合で勝つ(44名)	その他(45名)
5位	柔道自体を楽しく行う(31名)	礼儀正しさを学ぶ(31名)

中学校に入学したときに柔道を始めたきっかけについては、継続の有無にかかわらず体力の向上が第1位であった。しかし、継続者は、柔道本来の特性に興味を持っているのに対して、非継続者は、他の競技でも効果が得られることを重視している。

(4) 中学校入学以前から柔道の経験がある者について

	県大会3位以内	県大会出場	地区大会敗退
継続者	20名	27名	11名
非継続者	2名	19名	9名

(3)で継続者の入部のきっかけの第2位となった、「以前から柔道の経験である」ということに着目してみると、小学校から柔道の経験がある者は今回の調査では88名であった。そのうち、高等学校で柔道を継続している者は、58名であった。調査全体の継続率が42%であったのに対し、小学校からの経験者の継続率は66%であった。また、競技成績が低くても継続している傾向にある。

(5) 中学校時代の高校生との交流について(平成14年度のみ調査)(複数回答)

	継続者(84名)	非継続者(118名)
高校を訪問して合同練習をした	63名(75%)	50名(42%)
高校生の試合を見学した	47名(56%)	47名(41%)
高校生が中学校へ来て練習した	38名(45%)	45名(41%)

中学校時代に高等学校を訪問して合同で練習経験のある者は継続率が高い。言い換えると、高校で柔道を継続している84名のうち75%が中学校時代に高等学校での練習経験があるということである。しかし、中学校で高校生と練習した場合は顕著な特徴はなかった。これらのことから、単に高校生と練習する経験が、高校で柔道を継続する要因とはならないと推測される。高等学校という環境で練習するという事は、自分の将来の姿を想像できるのではないだろうか。「今は未熟でも、高校生になったらきっと上達できる」といった思いを感じるのであろう。

(6) 柔道への自信と才能について(スポーツ心理学的側面から)

	継続者	非継続者
運動に自信がある	53%	36%
運動は努力すればできる	77%	67%
柔道に自信がある	48%	31%
柔道は努力すればできる	91%	81%
体力に自信がある	36%	33%
小さいときから運動が得意	30%	28%

「努力すればできる」という統制感は、継続の有無にかかわらず、運動全般よりも柔道の方が高い。統制感が高いということは、中学校での柔道部活動が健全な精神状態で行われたことを物語っている。このこととは裏腹に「自信がある」といった有能感については柔道に対する意識のほうが低い。更に継続しない者の有能感が非常に低いことが示唆された。一般的に統制感や有能感の高さが、達成動機水準の高さを示しているが、本調査でのパラドックス(逆転現象)が柔道指導の問題と決定づけることはあまりにも短絡的であり、今後の課題としたい。ただし、柔道をリタイヤした者の有能感の低さが顕著だったことを鑑みれば、定期的に柔道部員の有能感を確認することは意義あることと感じる。

ところで、高等学校で柔道を続けられない理由として、「自分には柔道の才能がない」と回答した者が非常に多かった。この回答についても、有能感と密接に関係するものであり、中学校の柔道活動中に、自己を否定する経験を受けた可能性さえも窺える。大切な試合の勝ち負けにも原因はあるが、自分の価値観では正当な結果が現れたにもかかわらず、周囲(指導者や親)から、その結果を否定されるようなことが原因であるとすれば非常に問題は大きい。いずれにせよ、指導者や親と生徒との意識のズレを明らかにしていくことも今後の研究課題であろう。

4 まとめ

小学校から柔道を始めた者は高等学校まで継続する者が多く、中学校時代に高等学校を訪問して練習経験がある者は高等学校で継続する者が多い。小学校、中学校、高等学校という垣根を取り除くことは、柔道の振興と発展の方策として、一番重要なことであると感じた。本校柔道部においても部員が多かった頃は、よく中学生が練習に来ていたことを思い出した。なかには、合宿練習中には中学生でありながら、泊まり込みで練習に参加する者もいた。ところが、この3年間で中学生が本校に練習に来たのは1~2回である。中学校との関わりを積極的に行ってこなかったことも部員不足を招いた一因であるかもしれない。幸い柔道というスポーツは地域のスポーツ少年団の他に町道場も散在する。高体連の発展はここから始まるといっても過言ではない。我々高等学校の指導者は中学生や小学生の指導者と連携を密にしてゆくことが、重要である。

スポーツに取り組む目標として年齢が進むにつれ、競技者志向が高まることは事実であろう。従って指導者は試合の勝ち負けばかりを評価しがちである。実際に、私自身もそのような傾向にある。今回の意識調査で「努力すればできる」と思いながらも、「自信がない」「才能がない」と感じ、15歳くらいの年齢で柔道を断念していく生徒があまりにも多いことは残念である。指導者として、生徒の目標が達成できなかった時の働きかけとして、試合に至るまでの日々の努力の過程を評価したり、今後目指そうとする目標の方向付けなどが必要なことであると考えられる。また、指導者の目標と生徒の目標のズレが生じないように、指導者と生徒がコミュニケーションをとりながら、共通の目標設定をしていくことも必要であろう。このことについては、中学校の指導者だけの傾向ではなく高等学校の指導者にも共通することであると考えられる。指導者は、生徒が目標を見失ってしまうような働きかけをしないように、心がけなければならないのではないだろうか。

本調査から、高等学校まで柔道を経験した者が指導者になったとき、指導している生徒が高校生になっても柔道を継続するような動機付けをすることができる傾向が強いことがわかった。このことは今後の指導者養成に関わる研究課題といえよう。いずれにしても、今回の調査段階では、高校生の競技人口を増加させることは将来の小中学校の指導者を増加させることにもつながる可能性があり、柔道の振興発展に望ましい循環が生じることが想像できる。しかし、柔道未経験の指導者に指導を受けた者のうち個人戦において県大会3位以内に入賞した者は15人もいた。また、高校を訪問した中学生のうち指導者が未経験の者は45人もいた。このように未経験の指導者でも自分の経験不足を補うことや他競技の指導経験を柔道の指導に生かしていると思われるすばらしい指導者も多数存在することもわかった。このことは、中学校の指導者だけでなく社会体育の指導者という立場にも当てはまる可能性は高い。

今回のアンケート調査を集計しながら感じたことは、生徒に柔道を継続させるための単純な答えは見つからないということである。具体的には、平成13年度と平成14年度との比較や男女の比較などにおいて有意差を見いだすことはできなかった。部員不足に多くの指導者が悩み、本研究会のように普及活動に本格的に取り組んでいる組織や指導者は全国に多数存在すると思われるが、普及に関わる「特效薬」を簡単に見つけることは難しいであろう。以上のように普及や振興のような研究や活動は決して短期的に成果が出るとは言い難い。今回の研究結果から、練習会の有効性が明らかになったので、今後は積極的に練習会などを開催し、中学校との関係づくりにも取り組んでいきたい。